

世界が進むチカラになる

MUFG ⑦

挑戦  
する企業

国際社会に説明

三菱UFJ銀行は9月をめぐり、日本の脱炭素化への取り組みと海外との違いをまとめた「MUFGトランジション白書2.0」を発行する。2022年10月に公表した同1.0に続く第2弾。サステナブルビジネス部長兼事業共創投資部部長の西山大輔は「重点的に投

「トランジション白書2.0」発行

資することで、日本の電気と熱の脱炭素化に有効となる技術をまとめたポジティブテクノロジーロジーストを作る」と話す。脱炭素への機運が社会全体で高まる中、メガバ

技術リスト作る

トランジション白書1.0では、世界の各地域の特性に応じて脱炭素の方向性が異なることを明確化。二酸化炭素(CO2)を高める(西山)。欧州の

日本の脱炭素化技術発信

ンクも温室効果ガス(GHG)を多く排出する業種への投資を抑制し始めた。対話を通じて顧客企業の環境対策を支援し、国際社会に日本の取り組みを説明する役割も求められるようになった。

排出源、他国との送電線の接続状況や天然ガスパイプラインの有無、エネルギー安全保障、社会政治的要因の4項目について日本と欧米の違いを比較し、欧米の行政当局の理解を得た。

EUタクソノミー、米国のインフレ抑制法(IRL)のほか、中国や東南アジアのグリーン投資基準を分析し、欧米のフレームワーク(語り口)で日本の取り組みを総括する技術リストを作る。

西山によると、世界各地域が最優先で取り組む脱炭素関連技術は、CO2の回収・利用・貯留(CCUS)、太陽光、風力、電気自動車(EV)という電気と熱に関わる

「海外と差異がある」と指摘する。日本がなぜこの3技術を推進するのかを2.0でまとめ、脱炭素化に向けた日本の存在感を世界にアピールする。(敬称略)



▲ 昨年のCOP27ではセミナーを開催し、MUFGの脱炭素化への取り組みを発信した

技術で共通しているという。日本もこの流れに類似しているが、「火力発電への水素、アンモニアの活用、水素やCO2の海上輸送、CO2からメタンを合成するメタネーションの三つの技術で海